

第11回新聞感想文コンクール

文部科学大臣賞

- ◇小学校1～3年生の部
山岡正太郎 (水戸市立五軒小1年)
- ◇小学校4～6年生の部
後藤大輝 (坂東市立長須小5年)
- ◇中学生の部
中村美桜 (牛久市立ひたち野うしく中3年)
- ◇高校生の部
高橋さくら (県立水戸二高1年)

茨城県知事賞

- ◇小学校1～3年生の部
須藤あいり (筑西市立川島小3年)
- ◇小学校4～6年生の部
金久保さくら (石岡市立東成井小6年)
- ◇中学生の部
池田美悠 (県立古河中等教育学校3年)
- ◇高校生の部
梶沙知 (県立高萩清松高2年)

学校賞

- 牛久市立ひたち野うしく中 (初)
- 水戸高等特別支援学校 (初)
- 筑西市立関城西小 (11回目)
- 稲敷市立あずま西小 (初)
- つくば市立島名小 (初)

主催：茨城新聞社
茨城新聞茨城会
後援：文部科学省
茨城県教育委員会
協力：茨城県新聞教育研究会
茨城県教育研究会
茨城県学校長会
茨城県高等学校長協会
茨城県PTA連絡協議会
茨城県高等学校PTA連合会

茨城県知事賞

小学校1～3年生の部



「わたしに出来ること」

筑西市立川島小3年

須藤 あいり

この記事を読んでわたしは、この前家族と一緒に行きついで電車に乗った時このヘルプマークがゆずせんせきの近くに表示されているのを見て出しました。ゆずせんせきとは、体の自由な人やおしんちゃんやおばあちゃん、赤ちゃんなどにせきをゆずる場所のことです。でもヘルプマークは、びょうきの人でもなかなか

か見た目では分からないような人が付ける物だと書いてありました。わたしは、ゆずせんせきでおおばあちゃんにせきをゆずってあげたことがあります。でもヘルプマークを付けている人を見かけたことはありません。もしヘルプマークを付けている人を見かけたらせきをゆずってあげたいと思いました。

お母さんが家のお仕事をしていて大変そうにしている時があります。その時、お母さんにたのまれる前に、自分からすすんで手助けをするようにしています。これがヘルプマークにしているなと思いました。

とが出来ると思っています。障害があってもなくても一人一人が支え合えばみんな笑顔になれると思います。お母さんが家族とすごしている時によく言う言葉があります。

「人数が多ければ多いほど、みんなで協力すれば色んなことが出来るよ。」この言葉を忘れず学校でもかたんの生活でも助け合っていきます。

小学校4～6年生の部



「レジ袋有料化から考える」

石岡市立東成井小6年

金久保 さくら

私はエコバッグを持ち、買い物をするたびに、「ゴミ問題を間近に感じています。」「私一人でもゴミを減らすことができる」とうれしく、他にできることはないだろうか。と探しているときに、「レジ袋有料化から考える」が私の目に飛び込んできました。

開発を進めていることや、量り売りで「ゴミを減らす取り組みをしていること」を知りました。環境に向き合った中で「アップサイクル」「アップサイクル」という新しい言葉に出会いました。「ダウンサイクル」は、製品としての役割を終えた新聞紙を再生紙にするなど、元よりも価値や質が下がり、いずれはゴミとなる

継続性のないリサイクルのことです。「アップサイクル」は、元の製品の「素材」をそのまま活かして、別の新しい製品にアップグレードして生まれ変わらせることです。リサイクルとは違い、原料に戻す際に使われるエネルギーを必要とするメリットがあります。

そこで、家族でアップサイクルに挑戦しました。私は風呂しきでティッシュカバーを作り、かわいく変身させました。母は、父の大好きなワイスキーの空きびんをドライフラワーと組み合わせてオシャレな花瓶に变身させました。妹は、お菓子の空箱でロボットやえん筆など、たくさん素材をアップグレードしました。

自分の生活行動を見直すことができ、物を大切に、何度もアップグレードしていくと思います。「レジ袋有料化から考える」で得た経験と

広げた知識を活かし、これからも環境のことを調べ、シェアし行動に移していくと思います。

中学生の部



「世界中の『肌色』」

県立古河中等教育学校3年

池田 美悠

肌色。今あなたはどんな色を思い浮かべましたか。おそらく、薄いオレンジ色を想像した人がほとんどでしょう。しかし、それは本当に肌色ですか。肌の色といふべきですか。黒人男性が白人警官に押さえつけられ亡くなった。黒人の高校生が不審者と間違えられ射殺された。テレ

ビからは理解し難い声の流れてきます。肌の色が違うだけで人の命が奪われてしまう、どうしてこんなに世界は残酷なのだろう、どうして人々は分かり合えないのだろうと素直に思いました。それと同時に、このような事件を起させる社会への失望も感じました。

そんな中、私はひとつの新聞記事が目にとまりました。「肌の色に合う商品」それは、人種問題の解決のために作られた五種類の絆創膏でした。薄い茶色から濃い茶色まで、黒人の方の肌色にも合うように作られたそうです。この記事を見て、人種問題の深刻さが改めて突きつけられ

たような気がしました。私は考えました。もしも自分がみんなと違う肌の色を持っていたら。周りから敬遠され、自分の肌の色を嫌っている時、その絆創膏を手にしたら。自分の肌色にもきつと価値がある、そう感じるでしょう。自分の居場所はあると、社会に存在を認められたような

気持ちになると思っています。実際有色人種の方たちの喜びの声をたくさん耳にしました。私たちは、この絆創膏を生み出した方々の想いに応える行動をしていかなければなりません。私は以前、ALTの黒人の先生と交流したことがあります。怖い、これが初めて会った時の第一印象でした。しかし、その先生はとても優しく、自分と違う「肌の色」を誇ることが出来る未来を待っているのではないのでしょうか。そもそも肌色を「肌色」といふべきでもなく、黒人白人という

合えたと、幸せがあるのでしょうか。今や、人種差別はすくなくなくなる問題ではありません。違う肌色を持つ

睦実 (常総学院高1年)
◇茨城県新聞教育研究会賞 安倍武蔵 (桜川市立岩瀬小3年) ◇岩田明香里 (つくば市立島名小6年) ◇松岡琴音 (牛久市立ひたち野うしく中3年) ◇照沼百々香 (水戸二高1年) ◇茨城県PTA連絡協議会賞 石原穂花 (鹿嶋市立高松小1年) ◇園部亜唯彩 (茨城大付属小6年) ◇根木ももこ (阿見町立竹来中1年) ◇茨城県高校PTA連合会長賞 神原

高校生の部



「変わってゆくもの」

県立高萩清松高2年

梶 沙知

悲しい事故や、乱れる経済状況が大きく取り上げられる中、隅の方ではあるが、変化した「音」という言葉に強く惹きつけられた。七月四日、約四か月ぶりにサッカーJリーグの試合が再開された。撮影した記者は、川崎―鹿島戦で聞こえてきた「音」に驚かされたと言った。ボールを保持する選手が、パスを出したいチームメートの名を呼ぶ声。ピ

ッチを一気に攻め上げる足音。審判が振り下ろす旗が風を切る音。いずれも、以前の試合から聞こえていたはずの音だ。無観客試合のため、サポーターの応援はないものの、変わったのはそれだけだろうか。新型コロナウイルスの影響により、オリンピックを始めとする大きなスポーツ大会や音楽コンクールなどが次々と延期、中止という形とな

ってしまっ。コロナウイルスの影響はあまりにも大きい。多くの人々の中には、夢が遠のいてしまった人もいられる。目指していた大会やコンクールが中止になってしまった人々の悲しさや悔しさは、きっと言葉にできないだろう。

次々と大きな決断がされていく中、私の学校でも二年に一度の文化祭が来年に延期となってしまった。そんな中再開されたサッカーJ

I。選手達の熱と、静寂に包まれているからこそ、サポーターの応援がいかにも大きく、力強いものだったかを感じ知らされたと言った。私たちがたくさん観客が制限され、今まで当たり前前に過ごしていた日々がなくなってしまうからこそ、お気付けされた事だ。それを感じたと言っている。変わったのはきつと音だけではない。あたり前を過ごすことができていた日々への感謝の気持ちや、助け合える人々の絆。つまり、私たちの意識が変わったのだ。

た。同十八日、観客が戻ったカシマスタジアムで鹿島イレブンが今季公式戦初勝利を挙げた。声で応援することはできないが、そこには大きな拍手

愛莉 (牛久市立ひたち野うしく中3年) ◇宮川純伶 (古河中等教育学校3年) ◇松田莉音 (牛久市立ひたち野うしく中1年) ◇海老沢愛桜 (茨城町立青葉中2年) ◇小林唯菜 (阿見町立竹来中1年) ◇藤村哲 (茗溪学園高1年) ◇大内歩夢 (水戸高等特別支援学校1年) ◇松浦慎之介 (広島県・崇徳高2年) ◇渡辺智也 (下館工高3年) ◇青木舞衣 (古河中等教育学校5年) (敬称略・順不同)

新聞感想文コンクール学校賞 歴代受賞校

回数	年度	校数	学校名
1	2010	3	関城西小、白方小、長戸小
2	2011	6	関城西小、土浦二小、長戸小、佐野小、村田小、麻生小
3	2012	19	関城西小、三笠小、五霞西小、吉田小、友部小、長戸小、常陸太田・太田小、土浦二小、吉生小、村田小、麻生小、石崎小、西小沢小、神栖・太田小、茨城大付属小、駒王中、緑岡中、土浦二中、茨城大付属中
4	2013	5	関城西小、土浦二中、茨城大付属中、緑岡中、谷田部東中
5	2014	5	関城西小、川島小、茨城大付属中、緑岡中、滑川中
6	2015	5	関城西小、川島小、神大実小、河間小、小栗小
7	2016	3	関城西小、川島小、神大実小
8	2017	1	関城西小
9	2018	1	関城西小
10	2019	2	関城西小、県立古河中等教育学校
11	2020	5	ひたち野うしく中、水戸高等特別支援学校、関城西小、あずま西小、島名小

入賞者一覧 (入位2賞除く)

- ◇茨城県教育賞 坂東桃佳 (土浦市立中村小2年) ◇海老根理咲 (茨城大付属小5年) ◇森美雪 (牛久市立ひたち野うしく中2年) ◇作田真惇 (波崎高1年)
- ◇茨城新聞社長賞 岡田菜奈 (鹿嶋市立高松小3年) ◇後藤秀斗 (坂東市立長須小4年) ◇斎藤彩葉 (阿見町立竹

- 来中1年) ◇小沼愛花 (水戸高等特別支援学校3年)
- ◇茨城新聞茨城会長賞 川村彩月 (筑西市立関城西小2年) ◇金子芽生 (土浦市立中村小4年) ◇大和田瑞夏 (つくば市立高崎中2年) ◇益子七海 (水戸二高1年)
- ◇茨城県教育研究会賞 穂山史歩 (桜川市立猿田小2年) ◇池田陽和 (筑西市立関城西小5年) ◇田中優朱 (牛久市立ひたち野うしく中2年) ◇沼本

- 美紅 (古河中等教育学校5年)
- ◇優秀賞 梶佐古昊憲 (鹿嶋市立高松小2年) ◇鈴木誉弥 (桜川市立岩瀬小2年) ◇又吉克樹 (笠間市立笠間小3年) ◇平田紗菜 (坂東市立長須小3年) ◇岩田和佳奈 (つくば市立島名小3年) ◇延岡明穂 (日立市立櫛形小6年) ◇松野笑寧 (稲敷市立あずま西小6年) ◇須藤ひな (筑西市立川島小5年) ◇塚遥香 (つくば市立島名小4年) ◇鈴木千樹 (坂東市立長須小4年) ◇佐藤

第11回新聞感想文コンクール



第11回新聞感想文コンクールの最終審査会。2020年12月2日、水戸市内。

茨城新聞社主催の第11回新聞感想文コンクールは、4部門の入賞者52人が決まった。文部科学大臣賞、茨城県知事賞を受賞した計8人の作品を紹介する(敬称略)。

コンクールは、児童生徒が新聞を読み、感想文を書き、読解力や表現力を高め、かつ、茨城新聞を扱う販売店をつくる茨城会(山本恒会長)と茨城新聞社が主催している。文部科学省と県教委が後援。応募総数は3431点で、過去最多となった。内訳は小学校1～3年生の部が364点、小学校4～6年生の部が1114点、中学生の部が699点、高校生が1254点。

文部科学大臣賞には、水戸市立五軒小1年の山岡正太郎さん、坂東市立長須小5年の後藤大輝さん、牛久市立ひたち野うしく中3年の中村美桜さん、県立水戸二高1年の高橋さくらさんが選ばれた。

入賞作品は、新型コロナウイルス禍や人種差別、環境など社会問題について、新聞記事を通じて自分自身のこと捉え、豊かな感性で分かりやすく表現した内容が目立った。

高校生の部

世の中には、さまざまな人種が存在しています。新型コロナウイルスの記事が飛び交う現代社会の中でも、世界の人々の中では人種差別という問題は消える事はありません。現代社会の中で特に人種差別をイ



「差別を越えて」

県立水戸二高1年 高橋 さくら

メッセージを込めた、それは黒人差別ではないでしょうか。今年五月に起こったある事件では白人警察官がある黒人の男性に必要以上の、極めて卑劣な行為を行い、殺害にまで至ったというニュースが世界を騒がせました。なぜ人種差別がおきるのか、

差別の背景には歴史的なことや文化的な違いによる偏見など様々です。しかし差別の壁をこえて奮闘している、ある一人の黒人女性の記事がありました。

な理由は「女性」ということで、黒人差別の垣根を越えて、男女の平等もつたえかけようという記事は、多くの人々の希望となったことだと思います。たしかに政治家になって国を動かせる人は限られています。しかしそ

の中に自ら立ち上がり、この現代社会の未来を築いていこうとする彼女の意志が感じられる記事だと思いました。

裏にかくされているであろう、彼女の一人一人の問題であるといえるのではないかと思います。しかしその中でも逆境に立ち向かい、差別の壁を越えて、支持を集めるハリス氏は私達が注目すべき一人だと思いました。彼女の持つ黒人としての誇りと強い意志をたたえたいと思うのです。恐れを知り、立ち向かう勇気を。

入賞者の作品を掲載した「優秀作品集」を発行しました。順次、各校にお届けします。

文部科学大臣賞

中学生の部



「教育の多様性と授業動画」

牛久市立ひたち野うしく中3年 中村 美桜

新型コロナウイルス感染拡大により長期の休校を余儀なくされた小学生が沢山いる中、県教育委員会では「いばらきオンラインスタディ」で授業動画の提供を始めた。年度内には動画の本数を四半本に増やす予定だという。動画の総再生数は着実に伸びており、活用が広がっている。

この記事を読んで私は教育について考えた。第一に、新型コロナウイルスによって教育の面で社会が得たものについてだ。今までに事例のない長期の休校によりこれまであまり活用されていなかったネットを活かすようになってきている点から、情報化が進む中で今までの教育の在り方を見直すいい機会になっていると私は思っている。

第二に、授業動画のメリットとデメリットについてだ。私が思う授業動画のメリットは二つある。一つ目は自分の好きな時間に学ぶことができる点だ。学校の授業では時間が決まっているため眠いときや体調が悪いとき、やるべきことがわかりやすく、手軽に学習できると思う。これらとは反対に、授業動画のデメリットは体験ができないこととコミュニケーションがとれないことだ。学校の授業では理科の実験のように自らやってみることもやみんまで考えを共有しながら学習する、質問することで深い学びにつながる。だが授業動画だけではあくまで一人のためだけに学習がなされる。これを解決する授業動画をつくることは可能なのだろうか。

第三に、今後の課題についてだ。前述の通り、授業動画のデメリットも課題に含まれる。しかしそれ以前に大きな問題があると思う。それは地域によって整備の格差があることだ。学校によっては優先順位を考えながら既に一人一台タブレット端末を配布しているところもあるが、導入する予定も何もないところもある。ただタブレット端末を配布すればいいというわけではないが、設備を整えることは新しい教育への第一歩となるだろう。

わかりやすく、楽しく、印象に残る学びのために教育も情報化社会の一つの柱として認知されていくべきだと私は思う。また、再び長期の休校になった場合に家でも学校でも変わらない学びができるように、授業動画を含めた教育の多様性を考えていくべきではないか。

中学生の部では、「コロナ禍での学校教育の課題から貧困、経済格差への対処など、現代社会の諸問題を捉え、新聞記事だけでなく、関連する資料も活用して感想を述べている作品が多く見られました。一方で、人と人とのつながりや家族の絆の大切さを考えた作品や、医療従事者に向けて心を配る作品など、感性

差別の問題は世界的問題であり、我々一人一人の問題であるといえるのではないかと思います。しかしその中でも逆境に立ち向かい、差別の壁を越えて、支持を集めるハリス氏は私達が注目すべき一人だと思いました。彼女の持つ黒人としての誇りと強い意志をたたえたいと思うのです。恐れを知り、立ち向かう勇気を。

小学校4～6年生の部



「奇跡の一枚」

坂東市立長須小5年 後藤 大輝

風鈴がびりびり音がら下がった写真。ぼやけてるなあ、何だろう、と手にしたこの写真のタイトルは「インシャルディスタンス」です。よく見ると、ご夫婦らしき二人の方が歩いています。真ん中の神社の灯籠が、二人のきりぎりすを感じさせています。すごい写真だなあとつぶやいてみました。

これは、下妻市の夏祭りの時のものだと思います。お祭りの出店のたぐいさんの風鈴が、夏の暑さを忘れさせてくれるのですが、それをぼやけてしまった。この写真が伝えたいのは、本当は並んで仲良く歩きたい、さんとおぼやさんが、少しきりぎりすを歩かずに歩きたい、ということだ。今のコロナ禍の世の中を映し出しているのだとわかりました。のどかなのに、どこかコロナを恐れる人々の気持ちが伝わる写真だとも思いました。

カメラマンの大和田さんは、今のコロナ禍を写真に収めながら、「早くコロナウイルスがなくなると、みんなが前の生活を取りもどせたらいいな」という思いをこめているのだと思います。この写真を通して、だれよりもコロナ禍の危機を知

ています。この写真が伝えたいのは、本当は並んで仲良く歩きたい、さんとおぼやさんが、少しきりぎりすを歩かずに歩きたい、ということだ。今のコロナ禍の世の中を映し出しているのだとわかりました。のどかなのに、どこかコロナを恐れる人々の気持ちが伝わる写真だとも思いました。

ほくたちは三月から五月まで休校になりましたが、その後は感染症予防をしながら、学校生活をがんばってきました。登校が始まってからは、NIEの学習をはじめ、たぐいさんの新聞記事を読んできました。コロナ禍の記事もたくさんありました。その中でこの記事は一番ほくの心を引きました。ほくは大和田さんに、「こんなすごい写真をとってくれてありがとう」と伝えたいです。

部門ごとに考察してみると、小学校1～3年生の部では、コロナ禍の中、親子で新聞を読み合い、話し合った上で感想をまとめている例が多く見られました。新聞記事を通して親子の会話がなされていくことがとても印象的でした。家庭の協力を感じました。

その学習活動には、目的意識を持って、新聞記事を選ぼうとする「主体的な学び」、新聞記事を通じてじっくりと読み込み、自己対話を通して、根拠を持って自分の考えを整理する文獻との「対話的な学び」、さらに、さまざまな立場や考え方に触れ、自らの考えを深めるとともに、現在の社会に目を向け、自分との関わりについて考えていくという「深い学び」が、学習過程の中にしっかりと位置付けられています。

小学校1～3年生の部



「かんせんしょうとのたたかい」

水戸市立五軒小1年 山岡 正太郎

おとうさんがむずかしいかおをしてくんぶんをよんでいました。なんのしんぶんだろうとおもってきいてみると、おとうさんがよんでくれているかんせんしょうのしんぶんのおいしさを本まげんちゅう先生が、天ねんとつういこうやゆうえんちたちむかっただいじょうおはなしたよ。

とおしえてくれました。ほくたちはまだかんせんしょうのしんぶんをよんでいません。夏のかぞくりよこやゆうえんちにもおもっていかれたので、でもしんぶんには水戸はんちゅう先生が、天ねんとつういこうやゆうえんち一年に九百人しんぶんをよんで、とたかいておもしろいかんせんしょうのしんぶんをよんでいました。

だ、とてもむずかくなりました。本ま先生もじが天ねんとつういこうにかかれないか、こわくなかったのかなとおもいました。おなじ水戸に、むかおもしろいよこやゆうえんちにもおもっていかれたので、でもしんぶんには水戸はんちゅう先生が、天ねんとつういこうやゆうえんち一年に九百人しんぶんをよんで、とたかいておもしろいかんせんしょうのしんぶんをよんでいました。

かんにんじやされていっていることを知り、つれていってしまいました。本ま先生のがおえや、手じゅうつしているえがかさってあり、すごいなおもいました。

ほくもしんぶんがコロナウイルスやびょうきをなおす先生になりたいとおもいました。おいしさんのかんぱり、天ねんとつういこうは一九八〇年にちぎゅう上からいなくなったとしんぶんにかいてありました。しんぶんがコロナウイルスもはやくいなくなると、かぞくりよこやゆうえんちにじゅうにいける日がくるといういとおもいました。

らせ、みんなの幸せを取りもどしたいと考えているのだと思います。ほくたちは三月から五月まで休校になりましたが、その後は感染症予防をしながら、学校生活をがんばってきました。登校が始まってからは、NIEの学習をはじめ、たぐいさんの新聞記事を読んできました。コロナ禍の記事もたくさんありました。その中でこの記事は一番ほくの心を引きました。ほくは大和田さんに、「こんなすごい写真をとってくれてありがとう」と伝えたいです。

新聞感想文を作成する際に必要なことは①自らの興味・関心、価値観に基づく主体的な新聞記事の収集・選択②新聞記事の内容の理解と自己内対話③記事の内容に対する自らの考えや意見の整理④読み手に分かりやすく伝えるための表現の工夫⑤というように、学習活動が一つのサイクルとなって展開されていきます。

講評



新聞から得る「深い学び」

県新聞教育研究会 会長 小岩 泰規

その豊かな意味からも、いま求められている「主体的・対話的で深い学び」を通して、読解力や思考力、表現力を養うことを狙いとする本コンクールの意義は、極めて大きいと考えます。今後、児童・生徒の皆さんは、新聞記事を通して社会とのつながりを感じながら、次代を力強く「生きる力」を身に付けてほしいと願っています。

（牛久市立ひたち野うしく中学校長）